

異世界の古代迷宮で探索者として転生した元ジャーナリストの Ω が迷宮の守護者 α に「ここから出たければ番契約を結べ」と石室に閉じ込められ最深部で番にされる話

「——深いな。ここまで来た人間は久しぶりだ」

声が石壁に反響して、方向が掴めない。

振り返ると、青白い光の中に男が立っていた。白灰色の髪を後頭部で雑に束ね、右腕から胸にかけて黒い紋様が走っている。左目の古い傷跡。閉じた瞳が開くと——鈍い灰色。

一九四センチの身体が、松明のない空間に影を落とす。

「記録を取りに来た」

リオンの声は平坦だった。前世の癖だ。取材対象の前で動揺を見せるな。怯むな。権力者に背中を向けるな——三十一年かけて骨に叩き込んだ作法が、転生した二十二歳の背筋を支えている。

「取材、か。312年間で初めてだ。殺しに来たのでもなく、宝を奪いに来たのでもなく」

「この迷宮の碑文を全て記録したい。最深部の古代文字まで」

左耳のピアスが振動している。封印の魔石。第九層に入ってから劣化が加速していた。身体の奥で、得体の知れない何かが蓋を押し上げようとしている。

（まだ大丈夫だ。魔石は保つ。碑文を写して帰る——それだけだ）

アルヴェルクの鼻腔が微かに動いた。灰色の瞳がリオンの全身を一度だけ走査する。

何かを嗅ぎ取ったような——

沈黙。

「最深部に最も古い碑文がある」

アルヴェルクは素っ気なく言って、背を向けた。

「読みたいなら、降りろ」

——毘だ。ジャーナリストの直感が叫んでいる。だがジャーナリストの業が、それを握り潰す。引き返すべきだと言われた場所にこそ、記事がある。

第十層。第十一層。

先導するアルヴェルクの背中には広い。黒い紋様が肩甲骨の間に這い、腰へ消えている。

「312年間、一人か」

リオンは取材者の声で問う。

「ああ」

「他に侵入者は」

「数十年に一度。全員追い返した」

「迷宮を出たいと思ったことは」

「——出られないものを、思っても仕方がない」

嘘を探す。見つからない。この男は嘘をつかない。312年、嘘をつく相手がいなかったのだ。

第十二層の入口で、魔石が大きく軋んだ。パキン、と表面にヒビが走る。身体の芯が一瞬だけ熱を噴いて——フェロモンが、漏れた。

ほんの一瞬。

アルヴェルクの足が止まる。振り返る。灰色の瞳の奥で、何かが一度だけ琥珀色に点滅した。

「——やはりか」

「……何の話だ」

「第十層で会った時から気づいていた。お前の匂いには不自然な空白がある。封印された Ω の匂いだ」

血の気が引く。

「——なぜ黙っていた」

「興味がなかったからだ。 β だろうが Ω だろうが、侵入者は侵入者だ」

(……興味がない?)

312年の孤独の前では、 Ω だの β だの、そんな区分は瑣末なのだ。この男にとってリオンの秘密は——どうでもいいこと。

「お前が Ω でも、碑文を読む能力に差はないだろう。——降りろ」

声色が変わらない。距離感が変わらない。

リオンの胸の奥で、何かが緩んだ。ジャーナリストとしての距離が保てる。碑文を読んで帰る。ピアスの魔石はヒビが入ったが、地上に戻れば新しい魔石を手に入れられる——

「お前の右腕の紋様を記録させろ」

手帳を開く。アルヴェルクが腕を差し出す。迷宮との契約の証——黒い紋様をペンでスケッチしていく。アルヴェルクは動かず、記録されるがままになっている。

「——お前は変わった侵入者だな」

「ジャーナリストだからな。人の秘密を記録するのが仕事だ」

「自分の秘密は隠すのに、か」

ペンが止まる。核心を刺された。

(……この男は。無自覚に急所を突く)

自分の秘密を隠して、他人の秘密を記録する。前世から繰り返してきた構造を、312年の孤独に干からびた男に看破される。

——でも大丈夫だ。碑文を読み終えたら帰れる。

第十三層。

「約定の間」に足を踏み入れた瞬間、背後の通路が閉じた。

石壁が轟音を立ててスライドし、入口を塞ぐ。振り返ったリオンの視界から、帰路が消える。

「——開けろ」

「俺が閉じたのではない。この部屋が閉じた」

アルヴェルクの声にも緊張がある。壁面の古代文字が脈動し、中央の石の台座が淡い金色に発光していた。

左耳で——パキン、と音がした。

魔石が砕ける。

破片が床に散らばる。リオンの全身から、封印されていたΩのフェロモンが噴出した。長年の封印の反動——通常の何倍もの濃度。石室の空気が甘く、重く、粘つく。

「くっ——♡」

膝が崩れた。

身体の内側から灼熱が込み上げてくる。下腹が疼く。カントが——触れたことすらしないカントが——じんじんと熱を持ち、太腿の内側を何かが伝い始めた。

(違う——これは——俺の身体じゃ——)

前世の記憶が軋む。東條遼は男だった。三十一年間、男として生きて、男として死んだ。なのにこの身体は——股の間に、こんなものが——

「あ……っ♡ なに、これ——カントから——勝手に——っ♡♡」

潤滑液が止まらない。太腿を伝い、膝まで濡らす。ヒートだ。封印を解かれたヒートが全身を焼いている。服の繊維が擦れるだけで皮膚が痙攣する。

アルヴェルクの身体にも変化が起きていた。灰色の瞳が琥珀色に燃え上がる。右腕の紋様が発光し、石壁に湿り気が滲む。焦がした針葉樹と鉄の匂い。312年間眠っていたα本能在、叩き起こされている。

「——碑文を読め」

声が変質している。低く、震えている。

「この部屋に入ったΩは——番の契約が成立するまで——出られない。碑文にそう書いてある。俺は読めない。お前が——読め」

這うように壁面に辿り着く。震える指で古代文字を辿った。視界が滲む。身体が燃えている。

「約定の間……ΩとΩが入室した時点で結界が起動……番契約が完了するまで——解除されない——♡」

声が震える。ヒートが思考を侵食していた。

「——出るには、番になるしかない、と」

「そうだ」

「……お前は——最初から知っていたのか」

「碑文は読めない。だが——この部屋の機能は、312年の間に何度か目にしている」

「——嵌めたな♡」

怒りで声が裂ける。取材対象に嵌められた。情報を操作された。ジャーナリストとして最も屈辱的なパターン。

「番にならなくても出る方法は」

「過去二度のΩは、十日間閉じ込められた後、ヒートが収まって結界が解けた」

「十日——っ♡♡ 耐えれば——出られる——っ♡」

「お前の場合は魔石で何年も封じた反動だ。十日で収まる保証はない」

α のフェロモンが鼻腔を焼くたびに、カントがきゅうと締まる。もっと奥を——何かで埋めてほしいという衝動が脳を侵食していた。

リオンは手帳を握りしめた。記録者であり続けろ。当事者になるな。距離を保て——

「ア……ルヴェルク——っ♡ 十日——俺は十日——っ♡♡」

「——番になれば、この呪いの鎖が緩む。312年分の苦痛が、少しだけ楽になる」

嘘をつかない男が、弁解もせず、ただ事実を差し出す。

「っ——触るな——まだ、交渉の余地が——っ♡♡」

アルヴェルクの手がリオンの顎を掴んだ。上を向かされる。琥珀色の瞳が至近距離にある。焦がした針葉樹と鉄の匂いが、脳の奥を焼いた。

「交渉は終わった。——ここから出たければ、番契約を結べ」

リオンの上衣が裂かれる。革鎧の留め具が弾け飛び、汗で透けた肌着の下に、尖った乳首が浮いていた。

「やめ——っ♡ 見るな——っ♡♡」

「見る。お前の Ω の身体を。——全部」

指が乳首に触れた。摘ままれる。

「お……っ♡♡ 乳首——触っただけで——前世じゃ、こんな——っ♡♡」

前世では何も感じなかった場所だ。東條遼の胸は、ただの皮膚だった。なのに今——指先一つで腰から力が抜ける。カントが新しい蜜を溢した。

（認めたくない——男の身体じゃないなんて——こんなの——）

ベルトを外される。ズボンを引き下ろされる。下着の布地が蜜で透けていた。

「——もうここまで濡れている」

「見るな——っ♡♡ カントを——見るな——っ♡♡♡」

両手で股間を覆おうとする。アルヴェルクが片手でリオンの両手首を掴み、頭上の壁に押しつけた。

（前世の俺を——見てくれ——男だった俺を——こんな身体じゃなくて——）

下着が剥がされる。カントが石室の青白い光に晒された。蜜で光り、割れ目が微かに開いている。

「っ——見ないでくれ——頼む——っ♡♡♡」

頼む。前世では絶対に使わなかった言葉。

アルヴェルクの指がカントに触れた。割れ目をゆっくりとなぞる。蜜が指を伝った。

「あ……っ♡♡ そこ——指——っ♡♡ 触ったこと、ない——
自分でも——っ♡♡♡」

「触ったことがないのか。自分のカントに」

「前世は——男だった——認めたくなかった——この身体を
——っ♡♡」

アルヴェルクの指がカントの割れ目を左右に開く。中の柔
らかい粘膜が露出する。蜜が糸を引いた。

「ひ……っ♡♡ 開くな——中まで——見るな——っ♡♡♡」

「312年間、何も触れなかった。お前は22年間、自分に触れ
なかった」

指がカントの中に沈む。一本。ゆっくりと奥へ。

「お——っ♡♡ 中——指が——入って——っ♡♡ こんな
——知らない——っ♡♡♡」

生まれて初めて、カントの中に何かが入った。前世の知識
にはない快感が脊髄を這い上がる。

（気持ちいい——嘘だろ——カントで——男の身体にある穴
で——）

内壁を指先が探る。弱い場所を見つけ、重点的に擦った。

「やだ——音——聞こえて——っ♡♡ カントが——ぐちゅぐ
ちゅ——っ♡♡♡」

ぐちゅ、ぐちゅ、と水音が石室に反響する。壁面の古代文
字がその音に応じるように明滅した。

二本目の指が加わる。カントの肉襞が押し広げられ、蜜が掻き出される。

「おっ♡ おっ♡ ふた——二本——っ♡♡ 奥——当たって——っ♡♡♡」

「お前のカントが鳴らしている音だ。——自分の身体を、認めろ」

（認めろだと——お前に何が分かる——♡♡ 男だったんだ——俺は——三十一年間——♡♡♡）

三本目。カントが限界まで押し広げられる。

「ッ——♡♡ 三本——裂けっ——♡♡♡」

子宮口に指先が触れた瞬間——リオンの背が弓なりに反った。

「おおっ——♡♡♡ イッ——カントで——イって——っ♡♡♡」

潮が吹く。アルヴェルクの手が潤滑液で光る。リオンは石壁にもたれて痙攣していた。涙が頬を伝い、顎から石の床に落ちる。

——だがヒートは収まらない。一度達したことで、身体がさらに開いている。

そのとき、腹の上に手帳が乗っていることに気づいた。行為の最中ずっと無意識に手放さなかった手帳が、汗と蜜で表紙を濡らしている。